

寧古塔紀略満洲語の破裂音・破擦音の音質(3)

—音質の検討—

吉池孝一

1. はじめに

『寧古塔紀略』の漢字音写満洲語には破裂音と破擦音が合計78例ある。その78例をみると大半は漢字の無声有気音に満洲語文語の t, k, c と現代満洲語口語二種(山本謙吾 1969 と清格爾泰 1982)の無声有気音 [t', k', q', tʂ'] が対応し、漢字の無声無気音に満洲語文語の b, d, g, j と現代満洲語口語二種(山本謙吾 1969 と清格爾泰 1982)の半有声無気音 [b, d̥, g̥, ɟ̥]①が対応する。異なる音特徴をもつ言語を互いに対応させた対音対訳資料のばあい、音の対応が一致する傾向を示しつつも、ある程度乱れるのがふつうのあり方である。しかるに『寧古塔紀略』はきれいな対応の一致を示す。このような対応の一致を示すことの意味について検討することが今回の目的である。

2. 『寧古塔紀略』の漢語音の質

『寧古塔紀略』の漢字音写満洲語の音質を検討する前に、満洲語を表記した漢字音がどのような質のものかということを検討する。著者の呉振臣は寧古塔(黒竜江寧安県)で生まれ(1664年)18年間の滞在の後に父の故郷である江蘇呉江に帰郷し(1681年)、40年間を呉方言地域で過ごし、60歳の頃(康熙六十年・1721)寧古塔での生活を回想して『寧古塔紀

---

① [b] のような有声音の下に補助記号 [.] を付した音はさまざまに理解される。慶谷寿信(1969)「無声音」の解説によると「普通には有声音である音が無声音として現われることを無声化(devocalization or unvoicing)といい、[b]のごとく、[.]の補助記号でもって示す。……略……。ただし中国語では北京語におけるように、閉鎖のやわらかい種類の無声無気音を [b̥] などと表わすことがある。」(126頁)とあり半有声音を指すわけではない。山本謙吾(1969)の「満洲語口語の音韻の体系と構造」は服部四郎・山本謙吾(1956)を再録したものであるが、それによると [b̥] [d̥]などを半有声音とし「弱音音素に該当する諸単位はすべて無気音であって、発話の頭位においては前半部が無声の半有声音、有声音の間では有声音、発話の末位及び無声音の前では後半部が無声の半有声音である。」(12頁)とする。清格爾泰(1982)には [b̥] [d̥]などの音質について特段の説明はないが、清格爾泰(1963)のモンゴル語音の説明に「b̥音は、両唇破裂音。無声の子音であるが、他の外国語の無声の p と比較すると噪音は一層小さい。この音を発する時、声帯は、閉鎖段階が緩む際にすき間ができるが、声は出さず、閉鎖が破裂すると同時に、声帯は緊張し、声を出す状態となる。」(237頁)とある。「噪音は一層小さい」とは閉鎖と破裂が緩やかな弱音(lax)の音質と解することができ、「閉鎖が破裂すると同時に、声帯は緊張し、声を出す状態となる」とは後半が有声となると解することができる。清格爾泰(1982)の [b̥] [d̥]などの用法は清格爾泰(1963)と同様とみてよいのであろう。有声音の下に補助記号 [.] を付した音はさまざまに理解されるが、山本謙吾(1969)と清格爾泰(1982)の [b̥] [d̥]などの用法は半有声音を示すとみてよい。

略』を書いた。寧古塔にいた幼少のころ家庭内の言語として江蘇呉江の方言を話したという。経歴から見て、北方の寧古塔一帯の方言音及び官話音、南方の江蘇呉江一帯の方言音及び読書音に接したと考えられるから、その何れかの漢字音によって音訳漢字を選択したことになる。文人に読ませることを前提とした著書に、意図的に口頭の方言音を利用するとは考えにくい。北方の寧古塔一帯に通用した官話音、もしくは南方の江蘇呉江一帯に通用した読書音によったとするのが穏当であろう。結論から言えば、漢字音写満洲語の音訳漢字の音は、北方官話を中心にしたものであるが、江蘇呉江一帯の読書音をも加味したものである。南北いずれの文人が読んでもよいように音訳漢字を選んだと私は考えている。そのように考える根拠を第3節と第4節で述べる。

### 3. 疑母字の用法

満洲語文語と現代満洲語口語二種（山本謙吾 1969 と清格爾泰 1982）のゼロ子音<sup>②</sup>に疑母字（中古音にあつては声母に  $\eta$  が想定される）の昂が対応する語例を挙げるとつぎのとおりである。これによると疑母字の  $\eta$  は消失していたとみることができる。

『寧古塔紀略』	満洲語文語	山本謙吾(1969)	清格爾泰(1982)
昂(疑母)邦阿馬「大伯」	<u>amba</u> ama	?ambu' 「大きい」, ?am 「父」	amba: 「大」, a:ma 「父」
昂(疑母)邦「大」	<u>amba</u>	?ambu'	amba:
昂(疑母)威赫「石名」	<u>ayan</u> wehe	無し	無し

満洲語文語の y と現代満洲語口語二種（山本謙吾 1969 と清格爾泰 1982）の [j] に疑母字の呀と硯が対応する語例を挙げるとつぎのとおりである。これによると疑母字の  $\eta$  は消失していたとみることができる。

『寧古塔紀略』	満洲語文語	山本謙吾(1969)	清格爾泰(1982)
呀(疑母)打「窮」	<u>yadahūn</u>	<u>jadxən</u> <sup>③</sup>	jadлвон
牙(疑母)哈「炭」	<u>yaha</u>	<u>jax</u>	ja:ba
硯(疑母)注「硯」	<u>yuan</u>	無し	無し

満洲語文語の g と現代満洲語口語二種（山本謙吾 1969 と清格爾泰 1982）の  $\eta$  に疑母字の牙と我と吾が対応する語例を挙げるとつぎのとおりである。この g については竹越孝(1998)が「-ng に後続する g-に対して例外なく疑母字を当てている」と現代北京語と異なる点の一つとして注意を喚起している。満洲語文語の -ng に後続する g が清格爾泰(1982)のように  $\eta$  であったため、疑母字の牙と我と吾を利用したと理解することができる。これによると疑母

② 厳密に言えば山本(1969)の [?ambu'] の ? はゼロ子音ではないが、音韻表記 amba にしたがってゼロ子音とする。

③ 山本謙吾(1969:46)には [yadxən] とあるが誤植とみて [jadxən] とする。

字は依然として  $\eta$  であったとみることができる。

『寧古塔紀略』	滿洲語文語	山本謙吾(1969)	清格爾泰(1982)
銘牙(疑母)「千」	minggan	mi $\eta$ an	mi $\eta$ ŋaː
佞我(疑母)「六」	ninggun	ni $\eta$ un~ny $\eta$ un	ni $\eta$ ŋun~ ni $\eta$ ŋy $\eta$ un~ni $\eta$ ŋun
蒙吾(疑母)「銀」	menggun	m $\eta$ ŋun~mu $\eta$ un	mu $\eta$ ŋun
貪吾(疑母)「百」	tanggū	ta $\eta$	ta $\eta$ ~ta $\eta$ ŋ

疑母字については  $\eta$  の消失と保存という相異なる出かたを確認することができるわけであるが、北京語系統の北方官話における疑母  $\eta$  の消失の時期が問題となる。唐作藩(2000)には次のようにある。元代の『中原音韻』(1324年)では疑母字のほとんどにおいて  $\eta$  声母は消失しているが、「仰昂印、傲鼻齜齜敖嗷嗷驚遨、哦蛾峨峨鵝俄、我、餓、額業鄴」等は  $\eta$  声母を保持していた。その後の『等韻図経』で「敖、我蛾、雅牙、昂、仰」等の字も影母の下に置かれていることからみて、“普通話”(北京語音)系統の北方官話音では16世紀から17世紀には、 $\eta$  声母は完全に消失していた<sup>④</sup>。ここで言う『等韻図経』は河北省順天府の徐孝撰『重訂司馬温公等韻図経』のことである。藤堂明保(1980)の解説によると、1602年(明の萬曆30年)に刊行されたもので旧来の韻図を河北の口頭音によって改めているという<sup>⑤</sup>。以上は口頭音が反映した韻図の話しであるが、読書音をまとめた韻書としては河北堯山の樊騰鳳撰『五方元音』が参考になる。成書年は順治11年(1654)から康熙12年(1673)の間とされる。藤堂明保(1980)の解説によると、清初に流行した通俗的な韻書で疑母  $\eta$  は消失しているという<sup>⑥</sup>。これに従えば口頭音においても読書音においても疑母は消失していることになる。『寧古塔紀略』の漢語は、これらよりも遅れる17世紀後半から18世紀前半のものであるから、その漢語にあつては口頭音においても読書音においても疑母は消失していたとみるのが穏当なところである。

以上は現代北京語に通じる当時の北方官話の話しであるが、江蘇吳江一帶の読書音の状況はこれとは異なっていたはずである。吳江を含む吳方言では現在も疑母字に  $[\eta]$  がある。錢乃榮(1992)によると、吳方言において疑母は、開口呼と  $u$  韻の前では  $[\eta]$  であり、齊齒呼と撮口呼の前では口蓋化した  $[\eta]$  で発音するという。合口呼で非  $u$  韻の字は吳方言の大部分の地域で  $h$  母として発音する。例えば上海では「偽」「魏」を  $[\hbar u \epsilon]$  とする。ただし僻

④ 「疑母字在《中原音韻》里大部分也失去了輔音声母  $[\eta]$ ，變爲零声母，因而和影母或喻母合流。……但是在《中原音韻》里，還有少部分字保持  $[\eta]$  声母。例如：仰昂印、傲鼻齜齜敖嗷嗷驚遨，哦蛾峨峨鵝俄、我、餓，額業鄴，等。現代某些方言也有類似的情況，但普通話早在十六七世紀之際就已完全失去了  $[\eta]$  輔音声母，因爲《等韻圖經》已將“敖，我蛾，雅牙，昂，仰”等字置於影母之下，表明這些字都已變爲零声母。」(46-48頁)。

⑤ 藤堂明保(1980)『中国語音韻論—その歴史的研究』東京：光生館、122-126頁。もと『中国語音韻論』江南書院、1957年。

⑥ 前掲藤堂明保(1980)、119-122頁。

地や老人にあつてはŋ声母を保っているという<sup>⑦</sup>。現代においてこのような状況であるからには、当時の読書音に疑母は有ったとみてよい。

さて『寧古塔紀略』の漢語音には、疑母の消失と保存の両者が見られるわけであるが、これをどのように理解したならばよいか。私は、『寧古塔紀略』の漢語音は、北方官話音を中心としたもので、それに江蘇吳江一帯の読書音を加味した南北音の折衷とみる。

どういうことかということ、満洲語文語のngに後続するgの音が問題となるが、この音に相当する『寧古塔紀略』の満洲語口語は、清格爾泰(1982)の現代口語方言のようにŋであったのであろう。ŋを当時の北方官話音で表記することができなかつたため、正確を期すために江蘇吳江一帯の読書音の疑母ŋの音を利用し疑母字を選択したのである。もともと、当時の北方官話の疑母のŋは消失していたとしても、-ng(-ŋ)韻尾に後続する母音始まりの音は、-ŋに同化して、北方の文人の耳に[ŋa]のような鼻子音に聞こえた可能性はある。そうすると北方の文人も、実質的には吳方言地方の文人と、ほぼ同様の音声を聞いたと見なしてよい。

北方官話音を中心としながらも江蘇吳江一帯の読書音を利用したということについては、つぎに示すように、濁音字の不使用にも見ることができる。

#### 4. 濁音字の不使用

『寧古塔紀略』の漢字音写満洲語口語の音訳漢字を、満洲語文語(ローマ字翻字)と対応させると表1のようになる。なおこの表は竹越孝(1998)にある満洲語文語と漢字の対応表を利用して作成したものである。

左より、満洲語文語のローマ字表記、音訳漢字の中古音の字母名、対応する音訳漢字と例数を順に記した。\*は満洲語文語の音と漢字音が合わず、対応の例外と見なすことができるものであり、これについては前回の吉池孝一(2022)で検討した。

表1 満洲語文語と音訳漢字の対応

満洲語文語	寧古塔紀略の音訳漢字
t	透母字：貪1 他2 突1 土1 托1 帖2
k	溪母字：喀1 克4 枯1 庫3 吃1
	匣母字：哈1
	*見母字：工1【kではなくgに対応すべきものである】

<sup>⑦</sup> 「疑母字在今開口和u韻前讀 [ŋ]，在今齊撮口前讀 [n̥]，許多地方有些字失落声母成爲f[u]或f(i, y)，如午悟 ŋu > fu，遇娛 n̥y > fy，誼義 n̥i > fi，在上海等大城市中這種疑母失落現象近年來有加劇趨勢。今合口非u韻的那些字在吳語大部分地區都讀f母，如上海[偽、魏 fūE113]，但在一些僻鄉，老年人仍保留ŋ母，如上海郊縣奉賢南橋鎮疑母保留最多。」(10頁)。

c	清母字：促 1 昌母字：扯 1 赤 1 *精母字：嗟 1【cではなくjに対応すべきものである】
b	幫母字：拜 1 頒 1 邦 2 百 1 驚 1 不 3 波 1 畢 1 必 2
d	端母字：打 5 得 1 多 2 對 1 *透母字：拖 1【dではなくtに対応すべきものである】
g	見母字：該 2 格 3 根 2 哥 1 姑 1 曉母字：漢 3 疑母字：牙 1 我 1 吾 2【疑母字の対応については第3節で述べた】 *溪母字：喀 1【gではなくkに対応すべきものである】
j	莊母字：查 1 壯 1 章母字：者 2 朱 4 精母字：濟 4 卽 3 見母字：甲 1

いかがであろうか。漢語の全濁声母（中古音で有声音が想定される）の破裂音と破擦音の字は一字も使用されない。当時の北方漢語の全濁音字の状況を、『重訂司馬溫公等韻図経』（1602年）でみると、全濁平声字は無声有気音となり、それ以外の全濁上去入声字は無声無気音となっており<sup>⑧</sup>、気音の有無については現代北京語と同様であった。『寧古塔紀略』の漢字音も同様であったと想定して大過はない。そうであるならば、満洲語文語の t, k, c, b, d, g, j に相当する音を、漢語の無声有気音字と無声無気音字で表記する場合、旧全濁声母字が混入してくるのは自然であるが、表1には一字もない。これはどうしたことであろうか。私は次のように偶然ではないと考える。

当時の江蘇吳江一帯の讀書音には破裂音と破擦音に三項の対立があった。すなわち、無声有気音と無声無気音と有声音である。当時の有声音が明瞭な有声の気音 [h] を帯びていたか否かはわからない。全濁音（有声音）字を使用すると、江蘇吳江一帯の文人が漢字音写満洲語を読んだ場合、全濁音字は無声有気音とも無声無気音とも異なった第三の音になってしまう。著者の吳振臣は、そのようなことによって引き起こされる混乱を避けるため、意図

<sup>⑧</sup> 陸志韋(1947)によると、『重訂司馬溫公等韻図経』（1602年）では全濁平声字は有気音の「如声」（現代北京語の陽平声（第2声））であり、全濁入声字は無気音の「如声」であったとする。そのことは陸志韋(1947)が挙げる『等韻図経』の全25図によっても確認することができる。陸志韋(1947)は全濁上声と全濁去声については去声となっていたとするが、気音の有無については明記しない。それが無気音となっていたことは全25図で確認することができる。その一部をみると次の通りである。通撰第一の表をみると、鄧（定母去声）が端母去声の下にある。贈（從母去声）が精母去声の下にある。定（定母去声）が端母去声の下にある。淨（從母去声）が精母去声の下にある。通撰第二の表をみると、動（定母上声）が端母去声の下にある。

的に全濁音字を排除したのであろう。無声有気音字と無声無気音字だけを使っておけば、北方の文人にとっても江蘇呉江一带の文人にとっても問題は生じない。著者呉振臣はそのような配慮をして音訳漢字を選択したものとおもわれる。

以上を要するに、北方官話音、南方漢語音（江蘇呉江一带の読書音や口頭音）、満洲語音に通じていた呉振臣は、漢字音写満洲語の漢字の選択にあたって、北方官話音を中心としつつ、江蘇呉江一带の読書音の知識をも参考にしたということである。

それでは最後に、漢字音写満洲語の漢字の選択の仕方から、満洲語の破裂音と破擦音の音質を考えてみたい。

## 5. 『寧古塔紀略』の満洲語音と漢字音の対応

現代満洲語口語の破裂音と破擦音が、どのような二項（強音と弱音、無声と有声、有気と無気など）によって区別されるかということについて幾つかの説をみると次のとおりである。破裂音と破擦音を、t と d で代表させる。

- |                  |                   |   |                  |
|------------------|-------------------|---|------------------|
| ①服部四郎・山本謙吾(1956) | /t/ (強音。[tʰ]~[t]) | — | /d/ (弱音。[ɖ]~[d]) |
| ②清格爾泰(1982)      | tʰ (無声有気音)        | — | ɖ (半有声の無気音)      |
| ③趙傑(1989)        | tʰ (無声有気音)        | — | t (無声無気音)        |
| ④愛新覺羅烏拉熙春(1992)  | tʰ (強子音。有気音)      | — | t (弱子音。無気音)      |

これについては、吉池孝一(2021a)「現代満洲語口語の破裂音と破擦音の音質について」において、現代の満洲語口語の破裂音と破擦音には、音質として、閉鎖が強い強音 (tense) と閉鎖が弱い弱音 (lax)、声の有無、気音の有無が認められるけれども、話し手と聞き手は気音の有無によって音の弁別をしており発音器官の緊張の有無や声の有無は余剰であるとみて特段の不都合はないとした。現代の満洲語口語にあってはそうであるとして、過去の満洲語口語については直接観察するわけにはいかないので確かなことはわからない。漢人や満洲人やモンゴル人が、満洲語とそれ以外の言語とを比較し、その音質について述べた過去の記述があれば、直接的な資料となり得るが、寡聞にしてそのようなものがあることを知らない。次善の資料として、漢人による古満洲語口語の漢字音写資料を利用することによって、満洲語の破裂音と破擦音の音質を“推測する”ことにした。利用する資料は『寧古塔紀略』（呉振臣著。1721年頃成書）に含まれる漢字音写満洲語である。

漢人が古満洲語口語を漢字で音写したわけであるから、漢人の言語能力がどのようなものであったかがまず問題となる。著者呉振臣の幼少時の家庭内の言語は呉語の呉江方言であるが、18歳まで寧古塔におり、そこで使用された漢語の北方官話（役人の言葉）、および満洲語口語をも習得した。家庭内の言語である呉江方言と北方官話の使用頻度がどのようなであったか、ということについての詳細はわからない。その後、父の故郷の江蘇呉江に帰り、そこで42年間を過ごし『寧古塔紀略』を書いたわけであるから、江蘇呉江一带の文人が使用する読書音にも通じていたはずである。

江蘇呉江の地で、漢字音写満洲語口語を『寧古塔紀略』に記す時に何を参照して音訳漢字

を選択したかということが問題になる。次のように、いくつかの場合を想定することができる。①紙に記録して残しておいた漢字音写満洲語を利用した。この場合、わざわざ呉江の方言音が反映した漢字音を用いることは想定しにくい。北方官話による漢字音に依ったとするのが穏当である。紙の上ではなく、脳中に記憶として記録していた満洲語口語を引き出して利用したという場合もある。この場合、②一旦漢字音に置き代えて文字と音を結び付けて記憶する場合と、③満洲語口語の音形をそのまま自己の聴覚印象にしたがって記憶する場合とがある。前者②の場合は①と同様に北方官話による漢字音に依ったとするのが穏当であろう。問題は後者③である。家庭内の言語である呉江方言をどの程度使用していたかによって、満洲語音を、呉江方言音に同化させて記憶したか、あるいは北方官話音に同化させて記憶したかが決まるわけであるが、詳細はわからない。

いずれにしても呉江の方言音の破裂音と破擦音には、例えば[t][tʰ][d]（現代呉方言の濁音 [dʰ] の音質<sup>⑨</sup>からみて[d]は有声の息を伴った[dʰ]であったかもしれない）のように、三項の対立があった。他方、当時の北方の官話音には[t][tʰ]というように二項の対立があった。呉振臣は、音を認識することにおいて、比較的幅のひろい能力をもっていたということになる。そのような呉振臣によって作られた漢字音写満洲語をみると、破裂音と破擦音は78例あるがその大半は下記表2のように、漢字音の無声有気音に、満洲語文語の t, k, c と現代満洲語口語二種の無声有気音 [tʰ, kʰ, qʰ, tʂʰ] が対応し、漢字音の無声無気音に、満洲語文語の b, d, g, j と現代満洲語口語二種の半有声無気音 [b, d̥, ɡ̥, dʒ] が対応する。対応しないものは8例あるが、吉池孝一(2022)は8例のうち6例については不一致が起こる理由について説明が可能であるとし、説明が困難であるのは2例のみであるとした。異なる言語の音特徴を、互いに対応させて対音対訳資料を作る場合、一致する傾向を示しつつも、対応はある程度乱れるのがふつうである。しかし『寧古塔紀略』の場合、その音の対応は表2のようにきれいな一致を示しほぼ例外がない。どうしてこのようなきれいな一致をみるのか、ということについて説明が求められる。

表2 漢字音と満洲語音の対応

漢字音写満洲語		満洲語文語	現代満洲語口語二種
無声有気音	⇔	t, k, c	tʰ, kʰ, qʰ, tʂʰ
無声無気音	⇔	b, d, g, j	b, d̥, ɡ̥, dʒ

⑨ 趙元任(1928)『現代呉語的研究』北京：精華学校研究院叢書第四種参照。「最要緊的一種從簡的地方就是‘bh, dh, gh, zh, z, v’這幾個聲母音值的寫法。在這次所做過的方音裡，大多數把這個讀成，‘清音濁流’的音，例如‘bh’讀如〔下圈 b 加彎頭 h〕，或〔p 加彎頭 h〕，又如‘z’母讀如德文派的〔sz〕，或〔s 加彎頭 h〕。但是這些在兩個元音當中（intervocalic position）的時候又都念成真的帶音的輔音了。」（30頁）

## 6. 『寧古塔紀略』 満洲語音の音質

『寧古塔紀略』の満洲語の破裂音と破擦音における二項の対立が、主に、強音と弱音、もしくは無声音と有声音によって成り立っていたとしたならば、それに漢語音の無声有気音と無声無気音とを対応させたばあい、対応に乱れが生じて、前節表2のような、きれいな一致を示すことはないであろう。『寧古塔紀略』の満洲語の二項の対立が、音声としてみた場合にも、話者の発話習慣としてみた場合にも、気音の有無によって成り立っていたため、満洲語の有気音と漢語の有気音、満洲語の無気音と漢語の無気音が、きれいに対応したと想定することができる。

なお余談であるが、第4節で「全濁音（有声音）字を使用すると、江蘇呉江一帶の文人が漢字音写満洲語を読んだ場合、全濁音字は無声有気音とも無声無気音とも異なった第三の音となってしまう。著者の呉振臣は、そのようなことによって引き起こされる混乱を避けるため、意図的に全濁音字を排除したのであろう。」と述べた。そのような面は有ろうが、いっぽうで意図的に全濁音（有声音）字を避けた理由として、満洲語の無気音の音質は、江蘇呉江一帶の文人が用いる読書音の有声音を当てるよりも、北方漢語音や江蘇呉江一帶の読書音の無声無気音を当てるほうがふさわしかったという面もあったのかもしれない。

### 参考文献（発行年順）

- 趙元任(1928)『現代呉語的研究』北京：精華学校研究院叢書第四種。
- 陸志韋(1947)「記徐孝重訂司馬溫公等韻圖經」『燕京學報』第32期、169-196頁。
- 陸志韋(1948)「記五方元音」『燕京學報』第34期、1-13頁。
- 服部四郎・山本謙吾(1956)「満洲語口語の音韻の体系と構造」『言語研究』30：1-29。『服部四郎論文集3 アルタイ諸言語の研究Ⅲ』（1-55、東京：三省堂、1989年）所載。
- 清格爾泰(1963)「蒙古語語音系統」『内蒙古大学学报』。『清格爾泰文集2』663-728頁、内蒙古出版集團・内蒙古科学技術出版社、2010年所収（蒙古文の漢語訳）による。
- 慶谷寿信(1969)「無声音」『中国語学新辞典』（中国語学研究会編）東京：光生館、126頁。
- 山本謙吾(1969)『満洲語口語基礎語彙集』東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- 藤堂明保(1980)『中国語音韻論—その歴史的研究』東京：光生館、122-126頁。もと『中国語音韻論』江南書院、1957年。
- 清格爾泰(1982)「満語口語語音」『内蒙古大学学报（哲学社会科学版）』。(1998)『清格爾泰民族研究文集』232-355、北京：民族出版社。
- 愛新覺羅 烏拉熙春(1992)『満洲語語音研究』京都：玄文社。
- 錢乃榮(1992)『当代呉語研究』上海：上海教育出版社。
- 胡增益 主編(1994)『新満漢大詞典』烏魯木齊：新疆人民出版社。
- 竹越孝(1998)「『寧古塔紀略』に見られる漢字音写満洲語語彙」『鹿大史学』45、1-19頁。

- 唐作藩(2000)『普通話語音史話』北京：語文出版社。
- 津曲敏郎(2002)『滿洲語入門 20 講』東京：大学書林。
- 姜維公、劉立強(2014)『東北辺疆卷 八 柳辺紀略 龍沙紀略 寧古塔紀略』中国辺疆研究文庫  
哈爾濱：黒龍江教育出版社。
- 吉池孝一・中村雅之・長田礼子(2020)『女真語と女真文字』付碑文拓本 10 種画像(JPEG)、  
愛知：古代文字資料館。
- 吉池孝一(2021a)「現代滿洲語口語の破裂音と破擦音の音質について」『KOTONOHA』第 228  
号(2021年11月)、20-31頁。
- 吉池孝一(2021b)「寧古塔紀略滿洲語の破裂音・破擦音の音質(1)—資料の整理—」『KOTONOHA』
- 吉池孝一(2022)「寧古塔紀略滿洲語の破裂音・破擦音の音質(2)—音の対応における例外の  
検討—」『KOTONOHA』第 231 号(2022年2月)、31-50頁。